令和元年度学校・家庭・地域連携サポート事業　主催：福島県教育委員会

地域学校協働研修会

【放課後子ども教室研修会】

目　的：放課後子ども教室推進事業の先進的な実施状況を見学したり、成果や現状について協議したりするなど、実践を学ぶための研修会を行い、事業に携わるコーディネーターやボランティア人材の資質の向上を図る。

実施日：令和元年１０月２５日（金）　　**場　所**：福島市吾妻学習センター　**参加者**：４９名

講話「『支援力』の向上をめざして」

福島大学　うつくしまふくしま未来支援センター
こども支援部門　特任教授　本多　環　氏

１　はじめに

- 現代は「変化の時代」であり、変化に適応しながら自分で考え、生き抜いていくことが求められている。子どもたちが悩みながら「よりよい自分」になろうとする過程を支援し、子どもたちの「自己実現力」を高める支援活動をめざしたい。
- 子どもたちは「社会性」を求められる。しかし、それが「苦しい」と感じている子どもが増えている。不登校になりがちな子は、「周りに合わせようとする子」に多い。
- 福島大学　うつくしまふくしま未来支援センター　こども支援部門では、将来を担う子どもたちに対して、支援活動から得た「支援知」を生かしながら、「社会力」の育成を目指した支援活動を行っている。

２　子どもたちの将来

- 人工知能の発達により、日本労働振興の４９％をロボットが担うようになる。
- 人間の寿命が１００才を超える時代が来る。
- グローバル化が進み、地球規模の課題を解決していかなければならない。
- 子どもたちは、予測不可能な時代を生きて行かなければならない。

→　そのために、子どもたちに「自分が持ち得た知識や技能を再構築しながら、自分らしく生き抜く力を高めていくこと」が必要である。

３　あなたの子育ては何型？

○　支援型・・・見守りつつ自立を促す
○　厳格型・・・できないところを厳しく教える
○　迎合型・・・子どもを叱らず甘やかす
○　放任型・・・子どもと一緒に何かをすることはない
○　虐待型・・・子どもを信用せず、合理的な理由もなく叱る

- 放任型と虐待型の子育てをしてはいけない。
- 「厳格型」で育てられた子ども
  →成長すると、所得と学力は高いが幸福感が低く、
  不安感が強い。自信がない人間に。
- 「支援型」で育てられた子ども
  →所得も学力も高い。不安感が少なく、前向きな思考へ。幸福感が高くなる傾向にある。
- 「支援型」の子育てを。

４　「支援」のあり方について

- 児童虐待により脳が傷つき、萎縮することが分かっている。
- 子どもたちに関わる大人は、子どもが「多動だから」といって、すぐに「発達障害」だと決めつけないでほしい。
- 子どもの問題行動に対する支援方法
  （以前）ソーシャルスキルトレーニング→「がまんできる子」「周りと関われる子」へ
  （今後）専門家に委ねることも大事→「何とかしよう」としない。
- 支援者がイライラすると、子どもへ悪い影響を与える。ぜひ「支援型」の支援をしてほしい。
- 母親に子どものいいところを伝えると、母親の子どもへの関わり方が変わっていく。母親の自己肯定感が高まると、母親も子どもへの関わり方が良い方へ変わる。「お母さんへの支援」も行ってほしい。
- 「子どもがどのような課題を抱えているのか」を見極め、「生き抜く力」を高められるような適切な課題解決的教育支援を行うだけでなく、子どもの自己肯定感を高めることにより「生き抜く力」を育てていく。

５　「愛着障害」について

- 「発達障害」
  「自閉症」「自閉症スペクトラム（ASD）」「LD」「ADHD」などの脳機能の障害
- 支援を必要とする子ども→「発達障害」の子どもだけではない。
  （例）　外国籍、LGBT、虐待を受けている子、英才児、貧困、愛着障害、トラウマ
  ストレス、複雑性 PTSD、HSC、発達性トラウマ障害、いじめ、不登校・・
- 子どもとうまく関われない（なかった）母親が増えている。特に福島は震災の影響が大きい。

６　「愛着形成」について

- 「愛着」とは、特定の人に対する情緒的な心の絆のこと。
- 「愛着形成」とは、安全や安心、保護への要求を満たしてくれる養育者とのやりとりを積み重ねるうちに、養育者との愛着を形成していくこと
- 愛着形成は「だれとでもできる」「やり直しはいつでも利く」

- 愛着形成の「３つの基地機能」・・・探索基地、安全基地、安心基地
  → 基地機能がうまく働かないと「愛着欲求行動」「自己防衛」「自己評価（自尊感情の低下）」へ。
- 「安全基地」をうまく作れなかった子どもが増えている。
- 母親が子どもに過干渉に接していても、愛着不全になることがある。これは、「タイミング」の問題であることが多い。子どもが関わってほしいと思っているときに、関わってあげられなかったため。
- 母親に心のゆとりを持たせるためには、父親の関わり方が重要になる。

７　「多動」について

- ADHD・・・「行動」に問題がある。いつも多動。
- ASD ・・・「認知」に問題がある。居場所感を喪失したときに多動になる。
- AD（愛着障害）・・「感情」に問題がある。ムラのある多動。
- 何から多動になっているのかをしっかりと見極めるために、専門家の力を借りる。

８　わたしたちにできること

- 放課後子ども教室や児童クラブの支援員などの立場の人が、子どもと母親の「居場所づくり」をする。それが自己肯定感の向上につながる。
- 「いいこと」を伝えるトレーニングをして、親子支援を進めてほしい。
- 子どもが「想像力」と「創造力」を高められるような支援をする。そのために、子どもの話をよく聞いて、よりよい関係性を作ってほしい。
- 「できたね。」「よかったね。」という褒め言葉だけではなく、「がまんしたね。」「よく見ていたね。」というように、子どもの結果の前の過程を具体的に褒める。

【参加者の感想】

- 本多先生の講話がとてもよかったです。さまざまな課題を抱える子どもたちに対し、子どものよいところを見つけ、それを保護者に伝え、子どもと親の自己肯定感を高めるように関わりたいです。
- 全体的に大変参考になりました。これからの子どもと親に関わることに自信がつきました。スタッフとして自信を持ち、楽しく関わっていきたいと思います。
- 今年になり、子どもに対して「よいところをあえて声に出して子どもに伝える」というトレーニングにトライしていたところでした。さらに、迎えに来た親、祖父母にも「今日よかったところを伝えてから『さようなら』をする」ということも行っています。私のトレーニングは間違いではなかったことが、今日の本多環先生からの講話からも学ぶことができました。これからも続けていきたいと思っています。「よいところ探し」はすてきなトレーニングです。

情報交換「『放課後子ども教室』よもやま話 ～笑顔あふれる教室をめざして～」

行政担当者、コーディネーター、安全管理員、活動指導員、児童クラブ保育指導員などがグループになり、それぞれの立場から意見交換を行いました。自分とは違う視点からの話を聞くことで、よりよい放課後支援のあり方について考えを深めていきました。

【話し合われた主な内容】

○　放課後子ども教室・児童クラブの現状と課題について
○　放課後子ども教室・児童クラブの運営における工夫について
○　放課後子ども教室に向けた行政側の取り組み
○　学校での子どもたちの様子について
　　（家庭・放課後子ども教室・児童クラブとの違いなど）
○　学校と放課後子ども教室・児童クラブとの連携について
○　保護者側の思い（学校や放課後子ども教室・児童クラブについて）

【参加者からの声】

- 他の子ども教室や学童などの取組みを聞くことができて、大変参考になりました。横のつながり、連携などが大切だと感じました。他の子ども教室の見学などもしてみたいです。
- グループ協議も大変有意義で、いろいろと参考になる話を聞くことができました。
- グループ協議は、毎回いろいろな所の活動内容や意見を聞けるので楽しみです。

○　本多氏の講義の内容について、参加者の方から「知りたいと思っていたことが分かってよかった」という感想が多数寄せられました。参加者の皆さんが、これまでの子どもたちへの関わり方を振り返り、今後への手がかりを得ることができる研修内容でした。

○　違う立場の方々で編成したグループで情報交換を行ったことで、学校・保護者・児童クラブ・放課後子ども教室・行政関係の連携の大切さを実感できた研修会となりました。参加したみなさんは、「『子どもたちの放課後』がより楽しく、安全で、人とのよりよいつながりが生まれる時間になるように」という願いを持って、熱心に話し合いに参加していました。

○　グループ協議の中で、多くの参加者がうなずきながら聞いていたのは、次の２つの意見です。

- 「目的意識を持って活動すること」が大切
- 活動内容や子どもとの関わり方について悩んだ時は、「一番大切なのは子どもたち」と考えること

子どもたちのよりよい成長のために、それぞれの立場でどんな関わりをしていけばよいか。参加者は、お互いの話を聞きながら、今後の自身の取り組みについてじっくりと考えていました。